

甲斐の旅 2019



2019年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

山梨県、旧国名で甲斐の国に3日間友人たちと行ってきた。今回の旅の目的はその甲斐の国の探訪、その中でもサントリー白州蒸溜所だ。そして武田信玄はじめ色々な人々の思いが詰まった場所を旅してきた。

■300才の旅が始まる

私の運転する車は山梨県を目指して中央高速を西に向かって快調に走っている。前方には富士山が綺麗に見える。車には鳩原（にゅうはら）さん、田中さん、竹田さんという人生の大先輩たちが乗っている。私を含めこの車に乗っている4人の年齢の合計は実に300才を超えている。

このメンバーはピースボートの船旅で知り合った仲間、船を降りても今回のように定期的に旅行に出かけている。

■甲斐の国といえば

山梨県、甲斐の国といえば武田信玄だ。私たちは今、その信玄を祀っている武田神社に来ている。武田神社は信玄の住まいだった躑躅ヶ崎館（つづじがさきやかた）の跡地にある。

信玄は戦の強さで有名だが、治水工事や農業・商業にも力を入れた。彼の名前のついた信玄堤はその最たるもので、近代以前で大河を人間がコントロールできる唯一の方法だと専門家から聞いたことがある。だから今でも山梨県民は尊敬の念を込めて「信玄公」と呼ぶ。

宝物殿で特別展をやっており、風林火山の本物の軍旗を展示している。この軍旗も素晴らしいが、宝物殿の中には当時の書き物や武器も展示されている。

旅の専門家として、私は戦国時代に実際に使われていた地図に注目する。

地図は甲斐を中心に描かれており、関東は相模（神奈川県）、上野（群馬県）まではしっかりと描かれているが、現在の東京、埼玉、千葉北部、茨城南には沼が点在しているだけになっている。つまり利根川の氾濫で使い物にならない土地で、信玄も興味がなかったらしい。

武田が滅び、家康が駿河の他に武田の領地も治めていたが、家康は秀吉から関東への国替えを言われて表面上はともかくも本心は相当に怒ったと言われている。地図を見ているとその理由も分かってくる。ただ甲斐の国も当初は洪水に苦しんだが、「信玄公」のお陰で豊かな土地になった。

■ここも善光寺

甲斐善光寺を訪れる。この寺は、長野の善光寺の出先の寺ではない。

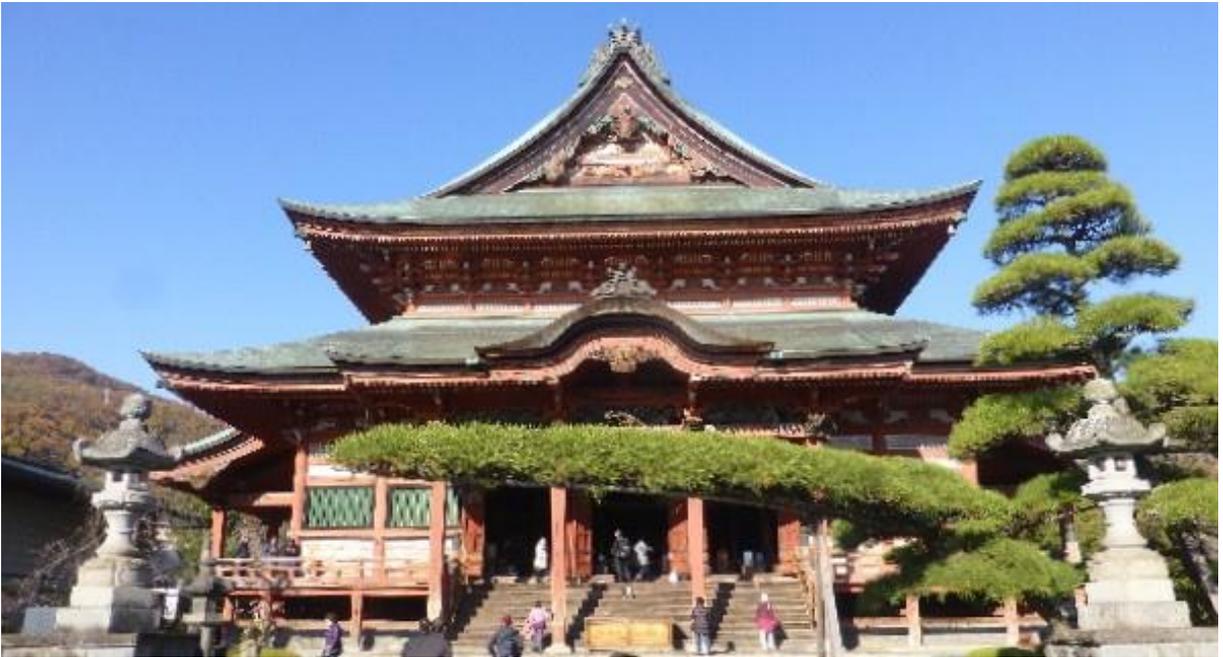
飛鳥時代よりも少し前の 538 年に百濟の聖明王から仏像が贈られたことから日本の仏教は始まるが、その仏像が蘇我氏と物部氏の争いの中で池に捨てられた。

後にその捨てられた仏像を「本田善光」という人が見つけて、自分の出身地に持ち帰り寺を建て安置した。その寺が信濃の国にあって、現在の長野の善光寺だ。

ところが川中島の戦いで信濃に出陣した信玄がこの仏像を持ち帰り、安置するために建てた寺がこの甲斐善光寺だ。持ち帰った理由は戦火を逃れるためということになっているが、私は単純に戦利品として持ち帰ったものだと考えている。真偽の程は分からないが、「信玄公」のことを悪く言わないという暗黙の了解があるのだろう。

仏像は武田家滅亡により信濃の善光寺に戻ったが、武田が滅ぼされなければ甲斐善光寺が本家の善光寺を名乗り、長野の方は信濃善光寺とでも呼ばれていたであろう。

歴史とは勝者によって作られていく。



■笛吹市にて

本日は「かんぼの宿石和」に泊まる。元は公共の宿で郵政民営化後は一応民間になっているが、設備やサービスはその面影が色濃く残っており、ある意味安心して泊まることができる。そしてこの宿は JR 石和温泉駅から徒歩 5 分程度と街の中心にあり、ワイナリーにも近い。

ご多分に漏れず、私たちも試飲目当てにワイナリー見物にやって来た。本日は日曜日ということで結構混んでいる。大型観光バスが 10 台くらい停まっており、試飲コーナーも土産物販売も大盛況だ。ワイナリーのスタッフは手慣れたもので、この大人数を見事にさばっている。

そして私たちは新日本三大夜景の一つ「山梨県笛吹川フルーツ公園から望む笛吹市の夜景」を見るためにフルーツ公園にやって来た。

私が前回ここに来たのは夏の昼間だったので夜景を見ることができなかったが、今は12月で、日の入りは4時30分くらいなので宿の夕食まで十分に夜景を見ることができる。

笛吹市はもちろん甲府盆地にあり山に囲まれており、山の稜線の上には富士山が顔を出している。この富士山の存在もここが新日本三大夜景に選ばれた理由かもしれない。

ついでに残りの新日本三大夜景は若草山（奈良）と皿倉山（北九州）から見る夜景で、昔から言われている日本三大夜景は函館山（函館）、摩耶山（神戸）、稲佐山（長崎）から見る夜景である。



尚、フルーツ公園やかんぼの宿のことは旅行記「石和温泉の旅 2019」で詳しく書いている。

■小淵沢にて

翌日、私たちは白州蒸溜所に行くために小淵沢の駅に降りる。ここで鳩原さんの友だちと合流する。友だちの友だちは友だちだと、私たちは昔から知っているかのように握手を交わす。

その地元の彼から教えてもらったことは、駅の階段を登ると面白いものが見えるという。それは日本の高さベスト3の山の頂で、1位の富士山（3776m）、2位の北岳（3193m）、3位の奥徳高岳（3190m）を見ることができる。

そんなポイントがこの小淵沢にあることを初めて知る。やはり地元の情報は重要だ。

ここからサントリー白州蒸溜所まではサントリーが用意してくれた車で移動する。

なぜ、そんな至れる尽くせりのことになっているのか。その理由が今回の旅の最大の目的になっている。

■サントリー白州蒸溜所

昨日は試飲目当てにワイナリーを訪問した。ワイナリーはその数も多く比較的ポピュラーだが、ウイスキーの蒸溜所は日本にはそんなくない。

山あいにある自然豊かな白州蒸溜所は、南アルプスの地下天然水を活かしたウイスキーづくりをするためにこの地に建設したという。

私たちは守衛所で名前を告げると現地スタッフが出迎えに来てくれる。特別待遇らしく工場見学のコースも一般向けでなく、帽子をかぶりイヤホンガイドをぶら下げてウイスキーづくりを知り尽くした講師が案内してくれる。

ウイスキーづくりの工程を最初から細部に渡って見せてくれて、さらに通りいっぺんの説明ではなく専門的なことやエピソードまで交えて話してくれる。

鳩原さんとその友人はウイスキーの達人、いわば専門家だ。私が理解できない専門的な質問を連発している。案内してくれる講師は「さすがですね、私より詳しい」などと半分お世辞を言って喜ばせてくれるから、鳩原さんだけでなく同行している私も嬉しくなってくる。



同行のスタッフに写真を何枚か撮ってもらったが、その時の掛け声には私はちょっと感激してしまう。

「皆さんいいですか、イチ、ニーの、サントリーですよ」と事前に声を掛けて、それでは本番と「イチ、ニーの、サントリー」でシャッターを押す。

あるいは写真を撮る時に笑顔にするためによく使う「はい、チーズ」ではなく、シャッターを押す人が「サントリー」と言い、被写体の人たちが「ウイスキー」と応える撮影シーンも私には心地よい。

些細なことだがブランドへのこだわりや愛社精神が嫌みなく伝わってくる。

サントリーという会社はしっかりしているが、茶目っ気ある社風のようなものを感じる。

■待ちに待った試飲

たっぷり工場見学をさせてもらい、待ちに待った試飲になる。

最近日本の国産ウイスキーは品薄状態が続いており、特に高級ウイスキーは手に入らない。よく聞く〇〇年物のウイスキーは目標の品質（味や香り）に到達しているのは当たり前として最低でも〇〇年以上経過しているという定義になっている。年数の記載のないノンエイジでも、つくり手の納得できる品質に到達するまでは10年くらいは必要だと聞く。

とにかくウイスキーづくりには時間がかかる。そして時間をかければかけるほどに熟成が進み美味しくなる。さらに時間の経過で原酒も年々蒸発していくので原酒の絶対量も熟成年数によっては半減するといひ、その希少さからどうしても高額になる。

今、品薄状態が続いているウイスキーはどれも相当昔に仕込んだ原酒によってつくられているが、時間をかけるということは投資した資金の回収が遅くなることで、事業としてはどこかで折り合いをつけないといけない。その折り合いが10年～20年というところなのだろう。

だからこの品薄は10年～20年前の原酒の仕込み量に起因しているのだが、その頃の日本は焼酎ブームがまきおこっていた。

その後になって世の中に変化が起き、ここ数年で日本のウイスキーは世界的に認められて海外でも高く評価されてきている。数年前のNHK朝の連続ドラマ「マッサン」で国産ウイスキーの誕生を取り上げたことも手伝って国内でも人気は急上昇している。そのために生産が追いつかない。いや、生産したくても原酒が足りないので品薄になっている。

そんな中、試飲に貴重なシングルモルトウイスキー「白州」などが出てきた。

品薄で世の中の人が口にできなくて申し訳ないとうことで、サントリーの社員は飲んでではならぬというお触れが出ているという。私たちが案内してくれたスタッフは「私たち社員はもう長いこと、このようなウイスキーは飲んでいないのですよ」と言いながら勧めてくれる。

ウイスキーは使われるポットスチル（蒸溜釜）はもちろぬのこと、貯蔵庫の中の保管場所や樽の種類によっても微妙に味わいが変わるという。それを見極めるのがつくる側の手腕になるが、私にはもはや芸術の領域のような気がする。

試飲によってその芸術作品の一端を感じることができたものの、まだまだ奥が深いことも十分に理解できた。そしてこの芸術作品をさらに感じ得るためにはもっと飲まないといけない。

■嫁に出した娘と再会

試飲を終えて、いよいよ本日のメインイベントになる。実は鳩原さんはウイスキーのミニチュアボトルのコレクターで、収集した数は2000本以上にのぼる。

もうすぐ86才になるという自身の年齢を考えると誰かにそれらを託さないといけない。かねてから知り合いの白州蒸溜所の初代所長に相談したところ、引き取ってくれることになった。鳩原さんのウイスキーにかける思いが通じたのだろう、白州蒸溜所内のウイスキー博物館で展示したというので本日はその展示を初めて見に来たという訳である。

それはちょうど娘を嫁に出して、父親が心配になって嫁ぎ先に様子を見に来たようなものだ。本日は嫁に出した娘との再会であり、新しい生活ぶりを見る機会である。

花嫁の父親が来るとあって、嫁ぎ先のサントリーも相応の対応をしてくれたのが特別待遇の理由である。

その娘たちの様子を見て、鳩原さんは満面の笑顔だ。いくぶん目が潤んでいるようにも見えるのは当たり前かもしれない。

娘たちは特別にあつらえたガラス張りの棚に並んでいる。棚はおおよそ横 3m、高さ 2m といったサイズで、背後には鏡があり明るいライトに照らされている。



■たかがミニチュアボトル、されどミニチュアボトル

さてそのミニチュアボトルとの出会いが、鳩原さんの人生を変えたと私は本人から聞いたことがある。

彼が 40 才の頃に仕事上の見聞を広めるために彼の携わっていた業界の先進国であるドイツに視察に行ったことから始まる。彼の勤めていた会社、あるいは世間一般の会社でもよくあることだが、昔は定年近くになって「長い間ご苦労さん」という意味合いで海外出張させることがよくあることだった。

ところが彼はそんな定年近くになってから海外視察に行ってもその貴重な視察を仕事に活かさないという考えから、自費で有給休暇を使って視察に出掛けた。何しろ 1 ドル 360 円の時代なので費用も半端でない。大金をかけた自己投資によって彼は本気になってドイツでの視察経験を仕事に活かし、その結果として成果も上がりそれなりの地位になったという。

ドイツに行く飛行機の中で出てきたのが、スコッチウイスキーのミニチュアボトルだった。彼はそれからミニチュアボトルの収集とスコットランドおたくへと進んでいくことになった。

63才で会社勤めを終えてから彼の本格的な活動が始まる。日本スコットランド協会に入り、スコットランドに十数回も渡りスコッチウイスキーの蒸溜所を回った。現地でコミュニケーションをはかるために英会話を勉強し、70才を過ぎてからも何度も海外語学留学をした。その延長で地球一周の船旅にも行き、私とも知り合った。

人間関係を広げるために現在でも大学の聴講生になっており、ライフスタイル研究会やサラリーマン文化芸術振興会（現在は解散）に入会する。その他にも健康維持のためにテニスや水泳教室に通い、俳句会にも参加している。

彼の人生はドイツへの視察、つまりミニチュアボトルとの出会いから大きく変わった。

彼が行う講演の一つには「たかがミニチュアボトル、されどミニチュアボトル」というタイトルを付けている。その講演の中で彼は3つの交流が大事だと言っている。それは異文化交流、異世代交流、異業種交流だという。

私はその3つの交流が重要な理由も、効果も十分に理解しているつもりだが、なかなか彼のように実践できない。唯一の救いは彼が本格始動した年齢の63才が、現在の私の年齢と同じということだろう。まだ間に合うかもしれない。

■山梨県の凄さ

信玄公が造った国はとても素晴らしいと聞いていたので、駆け足ながらその証拠を見て回る。

「芸術の森公園」の中には「山梨県立美術館」と「山梨県立文学館」があり、その真ん中にある岡本太郎の作品「樹人」が私たちを出迎えてくれる。

美術館に立ち寄る。

この美術館はミレーとバルビゾン派が有名らしい。ミレーはともかくも、バルビゾン派はあまり知られていない。それは1800年代中盤にフランスのバルビゾン村に画家が住み着き、あるいは滞在して、自然主義的な風景や農民を写實的に描いたことに由来する。

私はそれらの絵画をじっと眺めているうちにあることに気が付く。描かれている自然の風景が、ここ山梨県の風景によく似ている。

甲府駅前にある山梨県立図書館に立ち寄る。

私が初めてここを訪れた時には図書館と分からずに、先進的で斬新な設備や建物なので喫茶店か結婚式場かと思ってしまった。

この新しいタイプの図書館には同行のシニアメンバーたちも目を白黒させている。

やはり、信玄公は立派だったと改めて思う。

■ついでに神奈川

ついでに神奈川というと少し申し訳ないが、神奈川県の日産座間工場内に「日産ヘリテージコレクション」という日産の自動車の歴史博物館的なものがある。帰路でもあり工場見学の一環として予定に組み入れていた。

ここは 1930 年代からの大衆車や名車、歴代のレースカーなど約 400 台の車を所蔵しており、常時約 300 台を展示している。それらが 1 フロアーに展示されている様子は、実に壮観だ。

日本グランプリの優勝車「R381」や「R382」もある。これには私は大感激する。まさか本物を見ることができると思っていなかった。(写真手前)

他にも「ハコスカ」や「ケン・メリ」のスカイライン GTR、我が家にあった「チェリー」、友人が乗っていた「サニー1200」、「シルビア」まで、思い浮かぶ日産の車は何でもある。

予約は必要だが無料なので、おじさんたちにはお勧めの施設だ。



さらについでに、大和駅前の「大和市文化創造拠点シリウス」という施設を 3 人に教える。ここは図書館と文化会館をベースにした先進的施設で、山梨の図書館にも引けを取らない。

北条早雲が造った相模の国、神奈川県もなかなかのものだ。

■旅の記録

実施は 2019 年 12 月 8 日（日）～10 日（火）の 3 日間、その行程を以下に示す。

- ・ 1 日目 神奈川県から車で甲府盆地へ、昼食に名物ホウトウを食べてから武田神社、甲斐善光寺、ほったらかし温泉、山梨フルーツ公園を見物・散策し、モンデ・ワイナリーとマルス・ワイナリーを見学、かんぼの宿石和泊
- ・ 2 日目 電車で小淵沢へ、サントリー白州蒸溜所見学、かんぼの宿石和泊
- ・ 3 日目 山梨県立美術館、山梨県立図書館を見て、神奈川県に戻り昼食、日産座間工場へリテージコレクションを見てから、大和駅前シリウスの前で解散

総費用は一人当たり約 28500 円、内訳は以下に示す。主な支出はかんぼの宿で、車 1 台で行ったために交通費は安くおさまった。

宿泊費 一人当たり 21775 円（かんぼの宿石和 2 泊 4 食、アルコール込で 4 人分 87100 円）

交通費 一人当たり約 3600 円（車 1 台の高速道路 1970 円と 2510 円、ガソリン代約 3000 円、JR 中央線石和温泉⇄小淵沢往復 1716 円）

その他 昼食 2 回分、酒、つまみなど一人当たり約 3100 円